

難民支援 地域とのつながり模索

鎌倉のシェルターに8人

鎌倉市の北東の外れ、十二所^{じふにせ}。急坂を登った静かな木立の中に、「アルペなんみんセンター」はある。現在はスリランカやコンゴなどからの8人が身を寄せているが、その存在を知る人は地元でも少ない。コロナ禍で地域との交流機会は少なく、多くの人に難民の境遇を知ってほしいと模索が続く。

センターが修道院だった場所にできたのは昨年4月。名称は、イエス会の総長を務め、広島で被爆者の救援・介護に尽くしたペドロ・アルペ神父に由来する。

来日後に在留資格を失った外国人の中には、内戦や紛争などで身の危険を感じて帰国できず、出入国在留管理庁（入管）の施設に長期収容されて衰弱する人も多いという。

難民支援を長年続けてきたセンター事務局長の有川憲治さん（59）

は、難民申請中の人が落ち着いて暮らせる場所が必要と考えた。共感したイエス会が、広大な敷地と最大30人が寝泊まりできる建物を無償で貸してくれた。国内有数の大規模なシェルターで、難民申請の結果を待つ間、「仮放免」された人々を受け入れている。入所者は事情も出身も様々だが、入管施設でのつらい記憶は共通だという。収容施設で数年を過ごし、その間、1日の運動時間は30分しかなかったという女性は、センターに来た当初、数百歩も歩けなかった。ずっと収容施設の小窓から外を見ていたというコンゴ出身の女性は、センターの緑の庭を前に静かに涙を流し続けた。部屋の鍵を自分で持つことに感激した人もいる。

最初の半年、運営は有川さん一人だけで、入所者は自室にこもるばかりだったという。だが、次第にスタッフが増え、歌や英語、日本語のレッスンなどのプログラムが始まった。米国人シスターによる英語の授業に参加したミャンマー出身の女性（46）は、「変な英語になっちゃうけど、授業は楽しい」とほほ笑む。今年4月には管理栄養士も加わり、宗教に関わりなく食べられる料理を工夫。昼と夜は全員そろって食事をする。週1回の「みんなで話す日」には、日本語で共通ルールなどを話し合う。庭では野菜作りも始まった。母国で受けた迫害や入管の記憶などで伏し目がちだった人も、笑ってあいさつができる雰囲気になってきた。



アルペなんみんセンター事務局長の有川憲治さん



①シスター（左）による英語の授業を受ける入所者＝鎌倉市十二所
②フォジさんは紅茶をいれる手元だけ公開している＝アルペなんみんセンター提供

紅茶の淹れ方伝授・海岸清掃…地域通貨を介し

だが、40、50代中心の入所者たちには「大人なのに他人の世話になっている」という思いもある。「仮放免」だと就労はできない。誰かの役に立ち、社会とつながる機会を得ることも難しいという。そこで、5月にセンターにも導入されたのが、鎌倉市の地域通貨「クルッポだ」。「ピーチクリン」「皿洗いの手伝い」など、地域をつなぐ活動に対して、アプリ上でやりとりされる。例えば、「スリランカ出身のフォジさんが本場の紅茶の淹れ方を伝授」の体験を目的にセンターを訪ね、300クルッポを送ると、フォジさんが甘くて濃厚な紅茶を出してくれる。

フォジさんは、母国で政府要人の警護中に武装組織に銃撃され、右腕に重傷を負ったという。同僚は射殺された。日本に身を寄せて20年。常に目深に帽子をかぶってうつむく生活で、友人は1人もできなかつた。「紅茶を飲みに来てくれる人がいるのが、すごくうれしい」。表情は明るくなった。

ほかにも「手相を見ます」「草刈りなど手伝いにいきます」など、入所者が提供する様々な「体験」が用意されている。「今日は私、予約ある？」。入所者たちは来訪者を心待ちにするようになった。

有川さんは、「難民支援には、地域とのつながりが必要だ」と話す。難民申請中の人たちの多くは、家族と離れて孤独だ。「『疑似家族』として暮らしながら、地域と顔の見える関係を作り、自身の道を切り開きかけを見つけたい」（林知聡、織井優佳）